

## ”きべりはむし” 25年の歩み

高橋寿郎

1972年当時兵庫農大の学生であった辻 啓介氏の訪問を受け、今回若い虫好きの仲間と話合って兵庫昆虫同好会を結成したいと思うので協力してほしいむね依頼があった。当時兵庫県下には兵庫県生物学会は別として虫を中心にした同好会は虫同友会、淡路昆虫研究会がある位であった。なんとか県全体をまとめる同好会がほしいものだと考えていたときでもあり、私に出来ることがあれば協力させて頂くとして顧問に奥谷禎一先生を迎え、世話人として山本広一先生と共に参画させて頂いた。また本部は会務は総て辻氏がやるが拙宅にしてほしいと言うことから之も引き受けた。

会の主な目的は、県下の昆虫相を明らかにしてその生活史を詳細に調べることであった。当然機関誌の発行も必要となり“きべりはむし”が辻氏の手により、その創刊号(Vol.1, No.1, 2)が編集発行されたのが1972年12月であった。

“きべりはむし”は第2巻第2号迄執筆者の提出した原稿そのままゼロックスコピーしたもので発行された。第3巻になって“きべりはむし”はタイプ印刷になった。編集、印刷、発行すべて東京に辻氏がいる関係で東京で行われた。ところが1975年になって会誌編集、印刷、出版を一手にやっていた辻氏が一年間の予定でアメリカへ行ってしまい、留守の間遠山雅夫氏が引き継いだ格好で会誌の発行がされた。第5巻が出版されたのが1977年であった。会誌発行を引き受けた遠山雅夫氏は不慣れの上、本業の方が忙しく会誌発行が大変重荷になってきていた。そこで奥谷禎一先生と相談し、第6巻から全部私の所で出版することにし、改めて会員の皆様へ挨拶状を送り“きべりはむし”の継続出版について協力をお願いして第6巻1・2号の出版出来たのが1978年11月であった。“きべりはむし”のダブルナンバーの出版というのはこの第6巻が最後になった。とにかく県の同好会の中心的存在を維持してゆくために、会誌は毎年5、11月に必ず出版するというところを実行したいと思ったが、何分にも会員数が少なく、経理的に会誌印刷発行、発送費を賄うことが出来ない赤字経営での出発と同時に、原稿が充分に無いと言うことでこちらも大変苦労があった。

1982年が兵庫昆虫同好会設立10周年に当たると言うことで、兵庫県産甲虫類に関する文献目録・改訂版(B5, 42p)を自刊して挨拶状と共に会員の皆さんにお送りした。

会員の中には蝶屋サンがわりと少ない。従ってチョウの記事が少ない異色の会誌の出版が続いたことが会員数の増加にも勢いを得なかった大きな原因の一つにもなっているのだろうと思われる。それでも会員皆様の応援を受けて“きべりはむし”も毎年2号の出版を5、11月にすることが出来た。

発行の都度赤字が累積されてゆく、原稿の集まりも心細いといったことから“きべりはむし”の休刊を考え始めたのが第22巻(1994)頃である。時あたかも近藤伸一氏からの連絡があり、そのことを話したところ、折角今まで続いて来たのだから休刊せずに継続してゆこうではないか、印刷費を軽減するために高島 昭氏とも一緒にワープロによる編集をおこない、会員増加も積極的にしてゆこうと言うことで、お二人の後押しを頂き、それではもう少々続けることにと考えていたおり、阪神・淡路大震災が1995年1月17日に発生、多くの虫友達も被害を受けられ拙宅も半壊の被害を受け、再び昆虫とのお付き合いも中止すべきではないかと考えるようになったが、近藤伸一、高島 昭両氏の一層の応援を頂き、その年の5月第23巻第1号の出版を見ることが出来た(この号から表紙を近藤伸一氏の健筆による図で一新した会報になった)。ただ、まだ財政的には非常に不安定(Vol.24までの赤字は一応棚上げとしてスタートしたが……)な状況下の発進になったが、23巻には特別号の出版ということも実現した。

再生の“きべりはむし”であるがまだまだ努力をしなくては継続がむづかしい状況であり、一層の会員諸氏の応援を受けてゆかねばならないと考えている。

ここで“きべりはむし”25年の総目次と分野別目次をかかげて若干の説明をしてみたいと思う。

## 寄稿者

創刊号より25巻2号までの寄稿者は63名、掲載された報文は全部で619編、5編以上の寄稿者は24名である。ここに10編以上の寄稿者の一覧表を掲げる。

氏名	編数	氏名	編数
高橋寿郎	246	辻 啓介	14
新家 勝	66	遊磨正秀	14
近藤伸一	27	松本健嗣	13
森田真澄	22	加藤信一郎	12
田中 稔	18	西 隆広	11
高島 昭	17	奥谷禎一	11
森 和夫	15	遠山雅夫	10

## 記事の内容

分野別で多いのはコウチュウ目287, チョウ目137, カメムシ目53で他の目はほとんどない。トンボ目は27である。コウチュウ目が多いのは本会の特長のようなのである。チョウ目はガがわりとある。最近になって多くなったもので、初期の頃から中頃迄はコウチュウ目は非常に多かった。他の目の記事がほとんど無いのは大変淋しい。

## 会誌の体裁

“きべりはむし” 第1巻と第2巻は投稿者の原稿をゼロックスコピーをして作成された。第3号からは手書き原稿を活版印刷した。第23号からはワープロによる編集によって岩峰社で印刷をやって貰っている。

## 編集者の変遷

創刊号(1972)から第3巻第2号(1975)までは辻 啓介氏が編集を担当した。第4巻第1.2号(1975)は辻 啓介氏と遠山雅夫氏による編集である。第5巻第1.2号(1977)は遠山雅夫氏の編集で発刊された。第6巻第1.2号(1978)から第22巻第2号(1994)までは高橋寿郎の編集で発刊、第23巻第1号(1995)以降は近藤伸一・高島昭両氏による編集で発刊されている。

## 表紙

第1巻と第2巻は湯浅浩史氏健筆の“キベリハムシ”の図を用いた。第3巻から第22巻迄は目次による表紙の形態をとった。第23巻からは近藤伸一氏の健筆で毎号変わった図柄の表紙になっている。

## これからの“きべりはむし”

兵庫県昆虫相の解明を主目的にして設立された兵庫昆虫同好会の機関誌“きべりはむし”が早くも25年を過ぎようとしている。多くの県下の昆虫相についての報文が誌上に発表になってきたが、まだまだ県下の未調査地も多く有れば、未調査のグループも多くある現状だと思われる。組織的な調査などは公的機関若しくは専門調査組織でないとなかなか難しいと考えられるが、虫好きの虫を採集し楽しみながら虫を調べたいと云った者の集まりでその結果を発表する機関誌と云うことは、まだまだ多くの課題をかかえたまま進んでいる。これからもファウナ解明のための努力によって“きべりはむし”の存在も大であると思われる。更なる飛躍をはかりたいものである。

## 兵庫虫報

兵庫虫報は兵庫昆虫同好会結成5ヶ月たった1973年4月に、会誌“きべりはむし”と違って兵庫昆虫同好会の連絡誌として遊磨正秀、大倉幸彦両氏によって発刊が始まったもので(後に遊磨正秀氏一人で発行された)、ガリ版の4p.から8p.(B5)にわたるものであった。いろいろと兵庫関係のニュースとか昆虫界のニュースが紹介されて貴重なものであった。1巻4号(1974)、2巻4号(1974)、3巻3号(1975)と出版されたのであるが、残念ながら以後の発行はない。結構手間もかかれば経費もかかる出版で、休刊となってしまったことは大変残念である。